

Title	FROM<出発点>とTO<到達点>
Author(s)	上野, 義和
Citation	大阪外国語大学学報. 70(1) p.71-p.85
Issue Date	1985-11-30
oaire:version	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/81063
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

FROM と TO

<出発点> <到達点>

上 野 義 和

<はじめに>

現代英語における *'from'* と *'to'* は、通常一対となって現れ、移動行為に言及する動詞と共起し、それぞれ<出発点>、<到達点>を指し示すことができる前置詞である。この、<出発点>と<到達点>という二つの概念は、移動の始めと終りという意味では論理的には完全に対等のはずである。しかしながら、一見対等に思われるこれら二つの概念は、実はお互いかなり性質を異にするものであるということ——即ち、*'to'* はどちらかと言えば「無標識的」な語であるのに対して、*'from'* は「有標識的」な性格をもつ語であることを意味素性の違いによって示すことが本稿の目的である。

<§ I>

前置詞 *'from'* は、たとえば

- (1) John walked *from* the station.

(1)にみられるように、移動行為を示す動詞と共起して、移動の<出発点>を表すことができる語である。(1)の文は、さらに(2)のごとく、それに<到達点>を示す前置詞句を添えて拡大することができる。

- (2) John walked *from* the station *to* the hotel.

(2)に<経路>を示す表現を加えてより長くすることができる。

- (3) John walked *from* the station *across* the street *to* the hotel.

(1)→(2)→(3)の順序は、短い文が次第に長くなっていく過程を示すが、それは同時に(3)→(2)→(1)の順序も成立するということである。「移動」という物理的行為は、「ある物体が、時間の経過とともにそれが存在している地点XからXでない地点Yにその位置を変えること^①」と意味

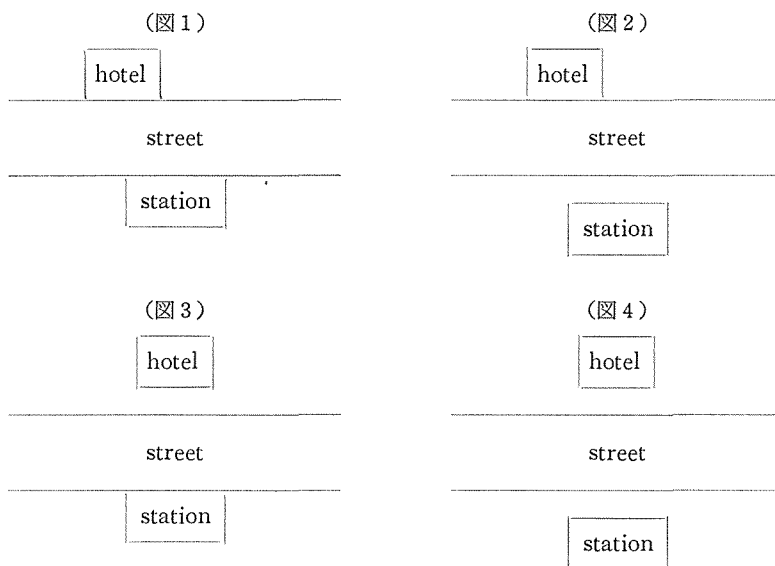
的に等価である。とすれば、「移動」が生ずれば、そこには必然的に〈出発点〉と〈到達点〉が存在しなければ論理に反することになる。よって、(1), (2), (3)の派生順序は、(3)→(2)→(1)であると考えられ、さらには(2)とともに(4)の文

(4) John walked *to* the hotel.

が存在し、(2), (4)の後には最も短い文(5)が存在する。

(5) John walked.

(3)の文に戻る。(3)は移動行為に不可欠の三要素である〈出発点〉、〈経路〉、〈到達点〉がすべて現れている文である。そして(3)は以下のさまざまな状況を示しうる。



これらのうち、(図1)はある点で他と異なる。即ち、〈経路〉としての‘street’の両端がそのまま〈出発点〉と〈到達点〉となっていることである。今、〈出発点〉から〈到達点〉まで連続して延びる移動の軌道を‘PATH’(行程)と呼ぶ。(図2)～(図4)においては、‘street’は〈行程〉の一部をなすにすぎない。これを‘ROUTE’(経路)と呼ぶ。(図1)では、‘street’は〈行程〉とも〈経路〉ともみなすことができる。‘from X to Y’の形では、〈行程〉が表されないことが多いが、(2)や次の(6)の文のように、

(6) John walked *along the street* from the station to the hotel.

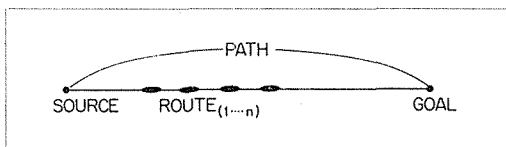
直接的に表現される場合も、(7)におけるように、

(7) John went from Boston to New York *by plane*.

間接的に示されることもある。

以上のことから、移動行為は次のような図式として表されよう。

(図 5)



(図 5)が示すごとく、〈経路〉を任意の数だけつけ加えることができる。

- (8) John walked from the station across the street
over the bridge...to the hotel.

‘from+to’に限らず、他の前置詞との組み合わせによる「〈出発点〉+〈到達点〉」表現は、通常、直線的な移動として捉えられる (Fillmore, 1971, pp. 26-27). この直線的軌道という基本概念は、‘from+to’が時間における軌道表現に転用される時、時間的 最短距離として現れる (Fillmore, 1971, p. 36).

- (9) *John lived from 1940 to 1970 via 1930.

< § II >

‘from’の意味特性について考えてみる。まず(9)の文をみてみよう。

- (9) The ball rolled *underneath* the table.

この(9)はあいまいな文で、状況によって以下に記す二つの意味解釈を許す (Quirk et al. 1972. §6.18).

- (イ) The ball passed under the table on the way to
some other destination.
(ロ) The ball rolled under the table and stayed there.

(1)の ‘underneath’ は、(イ)の解釈では〈経路〉の、(ロ)の解釈では〈到達点〉の役目を果している。 (9)の文中の主語 (ball) には自ら移動する能力が備わっていないので、(9)の読みは通常(イ)、(ロ)の二つにとどまるが、次の文

- (10) A mouse scuttled *behind* the curtain.

においては、‘behind’には三つの意味解釈が可能となる。〈経路〉と〈到達点〉に加えて、

- (ハ) The mouse stayed (scuttling back and forth)
behind the curtain all the time.

(ハ)の言い換えが示すように, ‘behind’ は「カーテンの背後という限定された一定の領域内」を示しうる (Leech. 1969. §8.73, Quirk et al. §6.18 Note). これを〈位置〉(POSITION) と名づけると, ‘behind’ の意味特性は次のようにまとめられる.

$$behind \left(\begin{array}{l} +ROUTE \\ +GOAL \\ +POSITION \end{array} \right)$$

これら三つの特性は *behind* にのみ限られるものではない。たとえば *over, above, below, beside, by, under* など他の多くの単一前置詞のみならず, *in front of* などの複合前置詞にもあてはまる⁽²⁾。が, このように複数個の特性を有する前置詞であっても, どうしても表すことができない概念がある。それは〈出発点〉である。(9)の *underneath* にも(10)の *behind* にも〈出発点〉なる特性を含ませることはできない。これら二文にその読みをもたせようとするれば, 各々次のように

(11) The ball rolled *from* underneath the table.

(12) A mouse scuttled *from* behind the curtain.

必ず *from* を含んだ文にしなければならない。英語では〈出発点〉は必ず *from* によって表されねばならない。何故なら *from* は〈出発点〉を示すことのできる唯一の前置であるからだ⁽³⁾。その証拠の一つとして, 以下に列挙するように, *underneath* や *behind* に加えて, 場所を示す多くの前置詞が *from* の助けなしでは〈出発点〉を表せない, ということをあげることができる⁽⁴⁾。

from above,	from across,	from along,
from amid(st),	from among(st),	from around,
from before,	from below,	from beneath,
from beside,	from between,	from beyond,
from down,	from inside,	from near,
from off,	from opposite,	from out (of),
from outside,	from over,	from round,
from under,	from up,	from within,
from without		

上記の各々から *from* を取り去ってしまうと, 残った前置詞だけでは〈出発点〉を示しえない。又 ‘*out of*’ や ‘*off*’ は〈出発点〉を表しうる表現とみなすことも可能であろう (Fillmore. p. 25)。しかしながら, ‘*from*’ と対をなす ‘*to*’ とのからみから論ずるならば, これらの語(句)は ‘*from*’ とはかなり性質を異にするものであることがわかるだろう⁽⁵⁾。‘*out of*’ はその反義語 ‘*into*’ と共起して

(13) The ball rolled *out of* the house *into* the hole.

(13)といえると同時に、二つの前置詞句の間に等位接続詞 *and* を挿入して次の(14)

(14) The ball rolled *out of* the house *and into* the hole.

のようにもいえる。(14)は(15)

(15) The ball rolled *out of* the house and it rolled
into the hole.

をその基底にもつ文であることからみて、‘roll out of the house’ と ‘roll into the hole’ とを別個の出来事として述べた文であるとみなしてよい。他方、‘*from*’ と ‘*to*’ の場合には、

(16) The ball rolled *from* the house *to* the tree.

(16)は文法的文であるが、

(17) *The ball rolled *from* the house *and to* the tree.

(17)は非文である⁶⁰ことから、‘from X’ と ‘to Y’ を別個の単位と促えることはできないということ、換言すると、両者は「分離不可能」な関係にあるということがわかる。このような理由から、Gruber (1976. p. 89) は *from* と *to* は構造をなす (in construction with) と考え、‘from-to’ という形で表す。要するに、両語は切れ目のない連続体であり、又同時にその意味において両語が生ずる順序は、本来固定されている。(16)はポーズを入れずに一気に読み通せる文だが、(16)の語順を入れ替えた(17)においては、

(17) The ball rolled *to* the tree / *from* the house.

‘from the house’ の前にポーズを置いて、それが ‘The ball rolled to the tree’ という文全体に添えられた、一種のつけたし表現であることを示さねばならない (Gruber. pp. 78-85 及び p. 91 ff.). その証拠に、つけたしの ‘from NP’ は(18)におけるように、

(18) The train arrived at the station *from* Chicago.

‘arrive’ のような、到達行為のみを示す種類の動詞を含む文にもつけたせるが、それが文中に含み込まれてしまうと、

(19) *The train arrived *from* Chicago at the station.

(19)のような文は非文になってしまう。

このように緊密に結合しあっている ‘*from*’ と ‘*to*’ であっても、両者を切り離してお互いどうしを比較してみると、統語的にも意味論的にもずい分相異なる性質をもっていることが明白になってくる。〈出発点〉と〈到達点〉という概念は、移動行為の始めと終りという意味では論理的には全く対等の関係にあるように思われる。しかしながら、現実の言語現象から見る限りでは、〈出発点〉表現の ‘*from*’ は〈到達点〉指示の ‘*to*’ に比べてかなり特異な存在となっている。

‘from’を「有標」、‘to’を「無標」とみなしてよいほどである (Ikegami, p. 126). 以下にその理由を示す.

[a] *from, to* の消去可能性

まず次の文をみてみる.

(20) John sold a book *to Mary*.

(20)の文を(21)

(21) John sold *Mary* a book.

と言い換えて ‘to’ を消去することができるが、他方、次の(22)

(22) Mary bought a book *from John*.

を言い換えて(23)

(23) *Mary bought *John* a book.

とすることはできない (‘John’ を利害の目的語と解すれば(23)は文法的文である). この事実は, ‘to’ をゼロ表現にすることには支障はないが, ‘from’ をゼロにすることが不可能であることを示唆する. 又、次の(24)

(24) John gave a car *to Mary*.

を受動化する時, ‘to Mary’ を主語化して(25)

(25) *Mary* was given a car by John.

を得ることはできるが、(26)

(26) Mary got a car *from John*.

における ‘from John’ を主語化して得られる(27)

(27) **John* was got a car by John.

は非文である. さらに、

(28) John moved *to the tree*.

(28)の〈到達点〉指示の ‘to the tree’ を 場所 の副詞 ‘there’ におきかえて得られる(29)は(28)を含意しうる⁷⁾.

(29) John moved *there*.

しかし、同様に

(30) John moved *from the tree*.

(30)の〈出発点〉表現を‘there’でおきかえて

(31) *John moved *there*.

(31)を生み出すことはできない。当然のことながら疑問詞‘where’に関しても同様である。

(32) *Where* did John move?

(32)は(33)を含意しうる。

(33) $\begin{cases} \textit{To where} \text{ did John move?} \\ \textit{Where} \text{ did John move } \textit{to?} \end{cases}$

一方、〈出発点〉を示すためには

(34) *From where* did John move?

(34)のように‘from’を使っていわねばならない。又、‘to-不定詞’の‘to’がしばしばゼロになることがある。

(35) John saw Mary *swim*.

(Cf. Mary was seen *to swim*.)

(36) Mary often helps her mother (*to*) cook.

(37) All John has to do is (*to*) go right now⁽⁸⁾.

英語においては動詞が連続するのを嫌う傾向があり、そのため、その間に‘to’を入れるが(Mary was seen *to swim*.), それでもなお以下の如く‘to’が脱落することもしばしば起る。

(38) go hang/go fetch/come see 等

[b] *from, to* が支配する NP の特性

(39) John started walking *from* $\begin{cases} \text{the tree.} \\ \text{the station.} \\ \text{the park.} \end{cases}$

(39)の文も(40)の文も文法的である。

(40) John jumped *from* $\begin{cases} \text{the galloping horse.} \\ \text{the train running at full speed.} \\ \text{the moving cart.} \end{cases}$

これらのことから、‘from’が支配する NP がさし示す物体は移動しつつあるものであっても、又そうでなくともよいことがわかる。このことを次のように表示しよう。

<i>from</i> +	NP
	[±MOVING]

他方,

- (41) John ran *to* {the tree
the station.
the park.

(41)は正しいが,

- (42) *John ran *to* {the walking dog.
the moving train.
the galloping horse.

(42)は非文であることから, '*to*' は以下に記す条件を満たしうる NP を支配しなければならないことがわかる。

<i>to</i> +	NP
	[−MOVING]

その理由は, 移動しつつある物体はたえず連続してその位置をかえ続けている, ということに求められよう。〈到達点〉は固定されたものでなければならない。さもないと移動行為が成就されないことになる。ところが, 〈出発点〉の場合には事情が変わる。ある物体がXを〈出発点〉として移動するということは, その前提としてその物体がすでにそこに存在していなければならないことになる。そして, そこに存在しているということは, その物体がそれまでにそこに移動到達していなければならないことになる。従って, 移動しつつあるものを〈出発点〉にとらえることには問題はない。移動しつつあるものを '*to*' は支配することができないわけだから,

- (43) John ran *toward* the galloping horse.

- (44) The ship sailed *for* New York.

(43), (44)のように, 「方向」のみ示すが「到達」を示せない語と共起しなければならない。ただ次のように,

- (45) John ran *into* the moving train.

- (46) John ran *onto* the moving cart.

'*into*', '*onto*' なら正しい文として成立する。これらの語は '*to*' を含んではいるが, いずれも真の到達点 (*in* なら列車の内部のどこか, *on* なら馬車全体のどの部分かということ) は明示されず, 前者は「外部から内部へ入る」ことを, 後者は「接触」を示すだけである。以上のことから,

(47) John ran *to* the train.

(47)の 'train' は移動中でない列車でなければならない。列車は本来 [+MOVABLE] ではあっても、(47)では [-MOVING] である。又

(48) John ran *to* Tom.

(49) Mary ran *to* Tom.

(49), (49)を等位接続して

(50) John and Mary ran *to* Tom.

とはいえても、

(51) John ran *to* Mary.

Mary ran *to* John.

(51)と(52)を結んでも(53)

(53) *John and Mary ran *to* each other.

は成立しない。

(c) be 動詞と *from*, *to* との共起

ある物体が移動を完了した時、〈到達点〉における物体の存在 (RESULTATIVE) は状態動詞、特に be 動詞で表される。

(54) John walked *into* the room.

(54)は(55)を含意する。

(55) John was *in* the room⁽¹⁰⁾.

以下の対において、いずれも上文が下文を含意している。

(56) { John went *under* the bridge.
John was *under* the bridge.

(57) { John swam *across* the river.
John was *across* the river.

(58) { John walked *beyond* the hill.
John was *beyond* the hill.

'*from*' についても同種の含意関係が成立する (Leech. §8.8).

(59) { (イ) John came *from* Boston.
(ロ) John was *from* Boston.

次のように、'*just*' や '*already*' を添えて「完了」の意を強く示すこともできる。

(60) John is $\left\{ \begin{smallmatrix} \textit{just} \\ \textit{already} \end{smallmatrix} \right\} \textit{from}$ the station.

‘*from*’ は、奪格 (ablative case) と深い関りをもつ語であることから容易に推測されるように、ある物体が〈出発点〉を離脱するということである。しかし、たとえば(60)の上文は、決して「ジョンは駅をちょうど離れたところだ」の意ではない。かといって、‘John is from the station’ なる文でその意味を表せるわけでもない。(60)は

(61) John has $\left\{ \begin{smallmatrix} \textit{just} \\ \textit{already} \end{smallmatrix} \right\} \textit{come}$ here from the station.

(61)と同義に解釈される。結局のところ、(60)は実質的には到達完了の意味をもっている。(60)は、表面的には〈出発点〉表現だが、意味論的には「出発点でないところ」即ち〈到達点〉示唆の文であるといえる。又 ‘to X=from not-X’, ‘to X=at X’ という等式が成り立つ。こういう理由で、‘*to*’ を「プラスの到達点」、‘*from*’ を「マイナスの到達点」という見方がでてくる (Lyons. 1977. §15. 5, Gruber. §§3. 1-3. 7, Leech. §8. 7. 2, Ikegami. p. 121 ff).

他方、‘*to*’ が〈到達点完了〉の指示の語であることは、

(62) John walked up *to* the mountain top.

(63) *John walked up *to* the mountain top but stopped halfway up.

(62)が正しい文で(63)が非文であることから明かである。しかし、次のように、

(64) John went *to* the hotel.

(65) *John was *to* the hotel.

「be+*to* NP」の形では〈到達点〉での位置を示すことができない⁽¹¹⁾。このことは、

(66) $\left\{ \begin{array}{l} \text{John walked } \textit{onto} \text{ the platform.} \\ \text{John was } \textit{on} \text{ the platform.} \end{array} \right.$

(67) $\left\{ \begin{array}{l} \text{John walked } \textit{into} \text{ the room.} \\ \text{John was } \textit{in} \text{ the room.} \end{array} \right.$

(66), (67)に示されるように、‘*onto*’, ‘*into*’ などにおいても、‘*to*’ を含む複合語の ‘*to*’ 以外の残りの部分でしか、移動後の状態を示すことができないことから一層明かになろう⁽¹²⁾。

これまで述べたことを以下にまとめる。

<i>from</i>	+	NP
$\left[\begin{array}{l} +\text{SOURCE} \\ +\text{RESULTATIVE} \end{array} \right]$		$[\pm \text{MOVING}]$
<i>to</i>	+	NP
$\left[\begin{array}{l} +\text{GOAL} \\ -\text{RESULTATIVE} \end{array} \right]$		$[- \text{MOVING}]$

< § III >

- {(68) John walked *from* the station *to* the hotel.
{(69) *John walked *from* the station *and to* the hotel.
- {(70) Mary ran *from* the door *to* the tree.
{(71) Mary ran *to* the tree *from* the door.
- {(72) The ball rolled *from* the house {*into* the hole.
onto the grass.
- {(73) *The ball rolled *from* the wall {*behind*
underneath} the sofa

(68)が正しく(69)が非文であること、そして(70)にはポーズが不要だが(71)には必要であることから、*'from'* と *'to'* は分離不可能な連続体であり、両者の基本的順序は *'from-to'* であることをすでに述べた。さらには、(72)が正しく(73)が非文 (*behind, underneath* を〈到達点〉表現とした場合)であることから、*'from'* の分身としての〈到達点〉表現は *'to'* (又は *to* をその一部としてもつ複合語)でなければならず、いかに *behind* や *underneath* が単独では〈到達点〉を示しえても *'from'* との結合体を作りえない、ということも明かになる。この結合体をなす *'from'* と *'to'* がお互いに多に異なることを §II で述べたが、以下でさらに両者が相異なる点を分析し、その相異点が実際の用法にどのような影響を及ぼしているかを考えてみよう。

まず次の文

- (74) The airport is $\left\{ \begin{array}{c} \text{far} \\ \text{remote} \\ \text{*near} \\ \text{*close} \end{array} \right\}$ *from* the town.
- (75) The airport is $\left\{ \begin{array}{c} \text{*far} \\ \text{*remote} \\ \text{near} \\ \text{close} \end{array} \right\}$ *to* the town.

(74), (75)は、‘from’は‘far’や‘remote’など「遠い」という意味的な共通項をもつ語とは共起するが、「近い」の意をもつ語とは共起しないこと、そして‘to’に関してはその逆のことが言える、ということを示している。‘from’は〈出発点〉から「隔りがあること」に言及し、‘to’は〈到達点〉まで「隔りが無いこと」に言及する語ではないかという推測が成り立つ。以下の現象はこの推測の証左となろう。

- (76) John is standing $\left\{ \begin{smallmatrix} \text{away} \\ \text{off} \end{smallmatrix} \right\} \left\{ \begin{smallmatrix} \text{from} \\ *to \end{smallmatrix} \right\}$ the tree.

(76)では, 'from' は 'off', 'away' という分離の副詞とよばれる語 (Lindkrist. §616, §619) とのみ

共起しているが、逆に ‘to’ はこれらの語と反撥しあっている。このことは動詞についてもあてはまる。

(77) The branch *separated* $\left\{ \begin{array}{l} \textit{from} \\ \textit{*to} \end{array} \right\}$ the tree.

‘to’ は動詞 ‘approach’⁽⁴³⁾、形容詞 ‘adjacent’, ‘close’, ‘contiguous’, ‘proximate’ など、いずれも「接近」や「隣接」を示す語と共起し、これらの語は決して ‘from’ とは共起しない。

(78) John is *approaching* $\left\{ \begin{array}{l} \textit{*from} \\ \textit{to} \end{array} \right\}$ Mary.

(79) John's house is $\left\{ \begin{array}{l} \textit{close} \\ \textit{adjacent} \end{array} \right\} \left\{ \begin{array}{l} \textit{*from} \\ \textit{to} \end{array} \right\}$ Mary's.

しかし、実際には、非常に近い距離を示す状況に ‘from’ が生ずることもある。

(80) John is standing only *two feet away from* Mary.

(80)ではジョンとメアリーの間の物理的距離はごくわずかである。それでも(80)を(81)のように言い換えることはできない。

(81) *John is standing only two feet (away) *to* Mary.

このことは、二者間の物理的距離がいかに小さな数字で表されようとも、‘from’ は一方が他方から「離れている」ことを表す語であることを示している。ここまで述べたことは以下の通りである。

<i>from</i>	[+REMOTENESS]
<i>to</i>	[+NEARNESS]

これら二つの意味特性は、両語が現われる慣用表現に大きく関わってくる。例えば、

(82) Wine is *made from* grapes.

(83) Desks are *made of* wood.

(82)において ‘from’ が使われているのは、原料のブドウと製品としてのブドウ酒の間に「隔り」が存在するからである。このことは、‘from’ は原料の形状や性質が変化する時に使われる、という一般的な指摘に通じる。他方、(83)の ‘of’ は ‘out of’ と意味上等価と考えられる。実際に次のような例が存在する（小西、1975. p. 776, 12 a）。

(84) This table is *made of* (or *made out of*) mahogany.

‘out of’ は ‘into’ と相補分布をなし、又

- (85) John went *into* the room.
 (86) John was *out of* the room.
 (87) John went *out of* the room.
 (88) John was *in* the room.

(87)は(88)を前提とし、(85)、(87)は各々(88)、(86)を含意することからも明かなように、両語は意味上密接な関係を有している。さすれば、(83)は次の(89)

- (89) $\begin{cases} \text{Wood is made } \textit{into} \text{ desks.} \\ \text{They make wood } \textit{into} \text{ desks.} \end{cases}$

と意味上等価であるはずだ。前述したように、‘*out of*’は「内部→外部」という移動行為を示すだけで、‘*from*’のもつ〈出発点〉表現とはちがう。このことは、この‘*of*’が‘*off*’と同じ語源をもつことからもうかがい知ることができよう。それ故‘*out of*’には‘*from*’のもつ「隔り」の意はなく、むしろ〈NEARNESS〉の含みがあると考えられる(Lindkvist. §642)。この意味特性が、‘*made of*’は通常、原料や材料の質が変わらない時に用いられる、という主張に結びつく。

とは言え、ブドウとワインの関係が常に(82)におけるように‘*from*’で表されねばならないということではない。次のように表されることもある(小西 p. 775)。

- (90) We make grapes *into* wine.

しかし、(90)は(82)と能動・受動の関係にあるという(小西 p. 775. 9 NB②)よりも、意味論的には次の(91)

- (91) We make wine *out of* grapes.

との関係において論じられるべきものである。このことは、材料が生物、特に人間である時、一層はっきりする⁽¹⁴⁾。

- (92) Many people…*make* a hero *out of* a killer. (p. 57)
 (93) …the novels and movies *make* a hero *of* a man who was not so heroic. (p. 57)
 (94) Jesse James was a famous badman whom the dime novels and movies *made into* such a hero. (p. 64)

上例が示すごとく、材料が人間の場合、常に‘*out of*’と‘*into*’が対立し、

- (95) *Many people *make* a hero *from* a killer.

(95)は非文となる。(92)～(94)では‘hero=killer (man, badman)’という等式関係が成立する(そして、(95)では hero≠killer になってしまう)。同じ環境に‘*from*’を使うと、‘from X=not at X’という基本的意味から考えて、「hero≠killer」という不等式が成立することになってしまう。かと言って、(83)でも「desk=wood」の関係が成立するわけでもない。しかし、(85)、(86)

が意味的に正常であるためには、‘John’ と ‘room’ の間には、それらの物理的の大きさにおいて、「room>John」なる関係が成立しなければならない。この大小関係は(83), (84), (89), (91)における抽象的移動にも適用されうるものと考えられる。(92)~(94)においても然り。(92)を例にとれば、「殺人者」をつくり上げているいくつかの構成要素のうちから「英雄的」なものをとり出して一人の英雄を存在させる、というのが‘make a hero out of a killer’の本義である¹⁴⁾。ここにも二者間の大小関係が成立しよう。「イコール」も「近い」という概念も、〈NEARNESS〉という概念で論じられるものであり、「遠い」とか「隔り」という概念で論じられるものではなからう。

以上述べた ‘from’ と ‘to’ の意味特性をまとめると次のようになる。

from	$\left(\begin{array}{l} +\text{MOTIONAL} \\ +\text{SOURCE} \\ +\text{RESULTATIVE} \\ +\text{REMOTENESS} \end{array} \right)$
to	$\left(\begin{array}{l} +\text{MOTIONAL} \\ +\text{GOAL} \\ --\text{RESULTATIVE} \\ +\text{NEARNESS} \end{array} \right)$

<注>

- (1) *around* は「ぐるっと一周」の意味では〈出発点〉と〈到達点〉が同じ地点となりうるが、一度は〈出発点〉から物理的に離れなければ移動行為は成立しない。
- (2) *over* には七つの意味 (seven senses: Quirk et al. §6.24) あるいは八つの意味 (eight meanings: Becker and Arms. 1969.) があるという主張もあるが、これらはすべて ROUTE, GOAL, POSITION という三つの意味特性が現実の具体的な場面に現れた際の意味を分類したものであって、結局、それらはすべてこれら三つの特性に吸収されるものである。
- (3) たとえば、(10)を A mouse scuttled *here and there* behind the curtain. と言い換えて間接的に〈出発点〉、〈到達点〉を示すこともできるが、これとても ‘*here and there*’ を直接的に表わそうとすれば ‘*from one place to another*’ のように、‘*from*’ を使わねばならないということである。
- (4) このリストから漏れた結合、たとえば ‘*from at*’ ‘*from in*’, ‘*from through*’ などには、それぞれにそれらが生じえないそれなりの理由がある。‘*from* NP’=‘not *at* NP’ という意味的等式が成立することから ‘*from*’ は ‘*at*’ を内包すると考えられる。‘*through*’ は、
 - (イ) I went through the tunnel.
 - (ロ) *I went through the tunnel and Bill went there too.

(ロ)が非文である (Silva. 1975. p.169. fn.3) ことから ‘*through*’ は到達点における位置 (POSITION) を表すことができないことになる (因みに(イ)の意は「トンネルを通り抜けた」という移動行為の完了)。とすれば、*I resumed walking *from through* the tunnel. (トンネルをぬけ出た所から歩きだした) は当然非文になる。その理由を、‘*through*’ が ‘*from one end to the other*’ と同意であることから、この語が ‘*from*’ を内包しており、同時に ‘*from*’ と ‘*to*’ は緊密な関係を有する分離不可能な結合体であるという事実に求めようとすれば、‘*from across*’ (*across*=*from one side to the other*) の説明が

つかない。又 ‘from in’ には正しい形 ‘from inside’ がある。

- (5) Ikegami (1981. p. 163 ff.) では, ‘from’ に〈起点〉, ‘out of’ と ‘off’ に〈起点的〉という名称を与えて両者の質の違いを示唆している。
- (6) (17)は非文だが次の(イ)はよい。
- (イ) John started *from* Boston and got *to* New York.
- それは, ‘start’ は〈出発点〉のみに, ‘got’ は〈到達点〉のみにしか言及できない語であるからで, この場合には〈行程 (PATH)〉がそっくり抜きとられている。(17)の ‘roll’ は 〈出発点〉+〈行程〉+〈到達点〉 という全行程をさし示す語である。
- (7) 「含意しうる」というのは, (29)の ‘there’ の回復可能性として, ‘in’, ‘on’, ‘under’ などと同様に ‘to’ も可能であるということ。
- (8) これは米語表現
- (9) 到達点を正確に明示するには, ‘into’, ‘onto’ はそれぞれ ‘to X in’ ‘to X on’ の形をとらねばならない。
- (10) (54)は John *is* in the room. をも含意するが, 以下の例でも ‘was’ で通すことにする。
- (11) スコットランド英語では ‘He is *to* the station.’ は非文だが ‘He is *away to* the shops.’ のような表現はかなり普通である (Leech. §8.8 Commentary a)。
- (12) Leech (§8.8.1) は ‘be onto NP’, ‘be into NP’ は文法的に正しいとするが, 筆者の調べた限りでは, Leech の主張を否定する母国語話者は多い。
- (13) 一語で「接近」を示すことのできる動詞は ‘approach’, ‘near’ 等意外に数が少ない。
- (14) (92)-(93)は R. Garica(1983) からの用例。

<参 考 文 献>

- Becker, A. L. & D. G. Arms, ‘Prepositions as Predicates’ in *Papers from the Fifth Regional Meeting of the Chicago Linguistic Society*. 1969.
- Dillon, G. L., *Introduction to Contemporary Linguistic Semantics*. Prentice-Hall, Inc. New Jersey, 1977.
- Fillmore, C. J., *Santa Cruz Lectures on Deixis*. Indiana University Linguistics Club. 1975.
- Gruber, J. S., *Lexical Structures in Syntax and Semantics*. North-Holland Publishing Company. 1976.
- Ikegami, Y., ‘Suru’ to ‘Naru’ no Gengogaku. Taishukan. 1981.
- Konishi, T., *Eigo Zenchishi Katsuyo Jiten*. Taishukan. 1975.
- Leech, G. N., *Towards a Semantic Description of English*. Longman. 1969.
- Lindkvist, K-G., *A Comprehensive Study of Conceptions of Locality in which English Prepositions Occur*. Almqvist & Wiksell International. 1976.
- Lyons, J., *Semantics 2*. Cambridge University Press. 1977.
- Quirk, R. et al., *A Grammar of Contemporary English*. Longman. 1972.
- Silva, C. M., ‘Adverbial -ing’ in *Linguistic Inquiry* 6.2. MIT Press. 1975.
- Garcia, R., *The Changing American West*. Shinozaki Shorin. 1983.